

## 家族凝集性からみた家族アセスメント尺度：展望

筑波大学大学院(博)心理学研究科 鈴木 久美子

筑波大学心理学系 小川 俊樹

The family assessment scales: A review of family cohesion

Kumiko Suzuki and Toshiki Ogawa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Family cohesion refers to the emotional closeness that ties family members together, but problems can often occur when this family cohesion is either extremely high or low. In this article, family assessment scales including questionnaires, projective methods and observational methods, are reviewed from the perspective of family cohesion. As there are both merits and demerits with these various methods, it is important to consider these various strengths and weaknesses in conducting exploratory research into the construction and use of test batteries.

**Key words:** family assessment, family cohesion, questionnaires, projective method, observational method.

### はじめに

家族凝集性とは、家族メンバーを結びつける情緒的親密さをあらわす概念として、主に家族心理学や家族療法の分野において研究されてきたものであり、問題を抱える家族をとらえる時に考慮される。構造的家族療法家の Minuchin (1983) によると、すべての家族は家族凝集性が極端に高い状態(纏綿 enmeshed 状態)と極端に低い状態(遊離 disengaged 状態)を両極端とする連続線上のどこかに位置づけることができるが、両極端に近づくほど病理の可能性が示唆されるという。纏綿状態の家族は、内向的で自分たちだけの小宇宙を作るため、家族メンバー同士のコミュニケーションと関心度は高まるが、その結果、家族メンバー相互の距離が減少し、境界が不鮮明になり、家族システムの分化が曖昧になる。こうした状態では、家族は感情的に同一化し、他人がまるで自分の一部であるかのように振る舞うようになるため、何らかのストレスが加わったときにそれがすべての家族メンバーに伝わり、過重な負担が経験されるという病理の可能性が考えられるという。

他方、遊離状態の家族は過度に硬直した境界を作り上げるため、家族メンバー間のコミュニケーションは困難となり、情緒的交流に乏しくなる。こうした状態では、家族はその保護的機能を十分に発揮できないといった問題が考えられている。

このように家族凝集性が極端な場合は家族にとって望ましい状態ではないことが示唆されているが、同時に Minuchin は、多くの家族がその成長過程で一時的に纏綿状態や遊離状態になる傾向があることを指摘している。たとえば、子どもの成長に伴い纏綿状態から遊離状態へと移行することや、また、家族の誰かに問題が生じたときにのみ一時的に遊離状態から纏綿状態へと移行することはむしろ自然なことであるというのである。このように、家族凝集性は固定したものではなく、時間的に可変なものであると考えられているため、臨床の現場で家族凝集性をとらえようとする際には、時間の経過に伴って随時アセスメントする必要性が出てくる。

家族凝集性という視点から家族をアセスメントしようというアプローチは国内外を問わず盛んであるが、方法論的には主に質問紙法、投影法、観察法の

3つに分類できる。以下に、各アセスメント方法別にその主たる特徴および具体的な尺度について、また、それらの尺度を用いて得られている知見について展望する。そして、今後どのような調査・研究が待たれるかといった点から、家族アセスメントの方法に関して検討する。

### 質問紙法

家族関係をとらえる方法には、大きく分けて二つあると言われている(大熊, 1992)。一つは、家族内の特定の人間関係に焦点を当てる方法であり、もう一つは家族を単位として、家族全体やそのシステムをとらえる方法である。前者は、家族内の人間関係を、たとえば「母-子」、「夫-妻」のように個別に取りあげるか、または「母から見た子」、「子から見た母」のように、個人が出発点にあつて、そこから見た家族ないし家族メンバーを問題とする。個人が出発点にある方法としては、親子関係診断検査が代表的であり、原理的には家族内の人間関係のすべての組み合わせについてアセスメントできれば、それによって家族全体をとらえたことになると考えられる。しかし、この方法は、もとより家族全体をとらえようとする意図がはじめからあまり強くない。それに対して後者は、個々の関係よりも家族を全体としてとらえようとする意図が質問紙の項目内容そのものに反映されている方法である。現在、家族全体をとらえる方法として日本で利用できる質問紙法は限定されているが、そうした中でもある程度広く用いられてきている方法として2つ、またそれらとの関係を見ながら作成された方法として1つ、計3つの研究を取りあげる。

#### 1. FACES(Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale)

ミネソタ大学のOlson, Sprenkle, Russellが50年にわたる理論的・実証的研究を活かして発表した円環モデル(1979)に基づく質問紙である。円環モデルでは、「家族メンバーがお互いに対して持っている情緒的きずな」をあらわすとされる凝集性と、「内的・外的な圧力に対する家族の変化の柔軟性」をあらわすとされる適応性の2つの次元を組み合わせることで家族を類型化して理解する。FACESシリーズ(I~III)という凝集性は、「情緒的結合、家族相互作用への関与の度合い、夫婦関係、親子間の連合、内的境界(時間・空間・意志決定)、外的境界(友人・趣味・余暇活動)」で、合わせて10項目で構成されている。また適応性は、「リーダーシップ、し

つけ、問題解決の相談、役割関係、きまり」で、合わせて10項目で構成されている。回答は「ほとんどない」から「いつもある」までの4件法で求められる。

FACESシリーズでは、凝集性と適応性の両次元においてともに極端な値をとらないときに家族機能の健康度が高いと評定され、一方、両次元で極端であるほど病理性が高いと評定される、というカーブリニア性を仮定している。しかし、本論文で焦点を当てている凝集性では、しばしばカーブリニア性が否定される研究結果が報告されている。たとえば、機能的心身症状をもつ青少年の家族とそうした症状を持たない青少年の家族を比較検討した研究(Walker, McLaughlin & Greene, 1988)、既婚男性2440名を対象として生活や環境の満足度および結婚生活の満足度を見た研究(Greenら, 1991)、ノルウェーの青年男女177名を対象とし、健康度を指標とした研究(Dundas, 1994)等がある。他方、わが国では、一般中学生の無気力度および高校生の自我同一性との関連を見た研究(立木・栗本, 1994)、一般中学生の登校ストレスとの関連を見た研究(立木, 1994)があり、凝集性が高いほど望ましい状態であることが示唆された。

これらの知見を踏まえ、横山ら(1997)は、仮定が検証されない原因として質問項目の問題を指摘した。つまり抽象的な項目内容の意味するものが、円環モデルの本来説明する家族凝集性ではなく、「家族の暖かさ」といったような、高ければ高いほど望ましいとされるものを反映している可能性があると考えたのである。これより横山らは、家族凝集性の概念整理をした上で、質問項目を具体的な家族の行動を問うものへと置きなおしてFACESKG(FACES at Kwansei Gakuin) IVの開発を試みた。FACESKGで定義された家族凝集性の極端に高い状態とは、家族メンバー間のあいまいな境界であり、互いにかみあい intertwined, 織りまぜあい interwoven, 過剰な巻き込まれ over involved, 気を取られている preoccupied 状態であった。そして成人した子どもを持つ両親(221組)を対象とした調査の結果、それまで検証されてこなかった家族凝集性の次元でのカーブリニア性が確認できたことを報告している。このFACESKGは、Olsonの円環モデルを理論的根拠とはしているが、FACESシリーズの翻訳版ではなく、日本の社会や文化に適合させるために、独自に項目作成したものである。現段階では、4段階のサーストン尺度項目が配置された父親版(34項目)、母親版(31項目)、子ども版(28項目)、英語版(29項目)が開発され、標準化が試みられている。

## 2. FES (Family Environment Scale)

Moos と Moos (1974) は、家族を各家族メンバーにとっての環境と位置づけ、家族が集団としても心理・社会的特性を家族メンバーによる認知と評価を通して測定する目的で FES を開発した。Social Climate Scale と呼ばれる一群の尺度のなかに位置づけられるこの尺度は、3 次元(関係性、人間的成長、システム維持)と10のサブスケール(関係性次元；凝集性・表出性・葛藤性、人間的成長次元；独立性・達成志向性・知的文化的志向性・活動娯楽志向性・道徳宗教性、システム維持次元；組織性・統制性)から成る。各サブスケールに対してそれぞれ9項目、計90項目について、「あてはまる」、「あてはまらない」の2件法で回答を求めるものである。

回答は各家族メンバーに対して求め、それぞれサブスケールごとに得点を算出することで各家族メンバーから見た家族環境の特性が把握される。得られた得点は FES からの家族メンバー個人の主観的情報であるが、さらに同一家族の複数のメンバーから回答を得ることにより、その不一致度などの指標に基づいて、全体としての家族の特性を客観的に評価することができる点が特徴である。しかし、あくまで FES がとらえるものは、家族の持つ心理社会的特性そのものではなく、それを個人が自らをとりまく環境として認知、評価したものである。

FES から得られる情報は有用であるとして、既に11ヶ国語に翻訳され、極めて多岐にわたり応用されている。日本では野口ら(1991)が思春期の子ども(中学生または高校生)を持つ家族、320家族を対象として日本語版の信頼性と妥当性を検討した結果、特に凝集性、独立性、表出性という3つのサブスケールが文化の影響を強く受けやすいことが示された。欧米の個人主義に比べて日本的集団主義にとっては、FES の家族凝集性は家族のサポートや思いやり、親密さ、一体感といった「家族の暖かさ」に近いものとして受け取られた可能性も考えられる。

## 3. FAI (Family Assessment Inventory)

西出(1993)により、中学生を持つ家族、227家族651名を対象として実施された調査結果より、家族システムの機能状態を把握する目的で開発された30項目、6件法による質問紙である。FAI は大きく分けて2つの次元から構成される。一つは、「親密で自由な家族内交流」と「家族に対する評価・凝集性」の次元で、円環モデルの適応性の次元(コミュニケーションスキル・家族満足度)に相当するような、家族機能に対して促進的な次元であると考えられている。このように FAI の凝集性は、極端でな

いことが望ましいとする内容ではなく、よくまとまっていることをよしとする日本の社会文化的な要因の影響を受け、高得点があるままよりよい家族機能を意味するような促進的次元としてとらえられている点が特徴的である。もう一つは、「家族組織の柔軟性・構成度」と「家族内の秩序・ルール」の次元で、こちらは極端でないことが望ましいとする内容とされる。そして高得点は家族メンバーが敏感に反応しあって混乱状態になったり、統制・規程が強すぎて苦痛を感じることを意味し、低得点は拘束的で硬直した状態に重苦しさを感じたり決まりが存在しないかあっても守られないようないい加減で浮動的な状態を意味するとして、望ましくないと考えられている。

FAI の信頼性については、内的整合性が検討されており、 $\alpha$  係数 .60～.86 という値を得ている。また、妥当性については、家族のストレス耐性を測ることで家族の機能状態をみるために開発された、Olson ら(1985)の「家族強度尺度」との相関関係から、「親密で自由な家族内交流」と「家族に対する評価・凝集性」の次元では高得点が家族機能に対して促進的であるとの仮説が検証されたが、「家族組織の柔軟性・構成度」と「家族内の秩序・ルール」の次元では極端でないことが家族機能に対して促進的であるとの仮説は検証されなかった。仮説が検証されなかった点について西出は、逆転項目によって表現された文章内容が必ずしも否定的な意味合いを表現できていなかったという、質問項目の文章表現上の問題を指摘している。

今後検討すべき課題としては、西出自身も Olson (1986) の「問題家族については、凝集性と適応性次元におけるカーブリーニアな関係が見られるのに対し、正常な家族についてはリニアな関係が存在するようである」との言及を引用し指摘しているが、問題を抱える家族とそうでない家族とでは得点の持つ意味自体が異なる可能性が考えられるため、対象者を広げ、また、文章表現に修正を加えることを重ねた上で、さらなる FAI の信頼性、妥当性の検討が考えられる。

上述してきた尺度についてまとめると、FES が家族をあくまでも個人をとりまく環境としてとらえて記述的に評価するスケールであるのに比して、FACES シリーズが Olson らの円環モデルをもとに家族の健康度を診断的に評価するスケールである、といった点で大きな違いが認められよう。また、FAI の信頼性、妥当性の検討過程において、問題を抱える家族とそうでない家族とで質問項目自体の意味する内容が異なる可能性が考えられたことから、

円環モデルに理論的根拠をおくスケールの開発に際しては、評価対象者の特性による影響を十分に考慮する必要があるといえるだろう。

## 投 影 法

質問紙法で得られる情報は、質問紙を構成する項目の内容によって異なる。たとえば特定の二者関係を想定させる場合と、全体としての家族を想定させる場合とでは、使用する項目の内容自体が異なるのである。しかし、項目内容自体に家族全体が部分(特定の二者関係)のどちらかのニュアンスを含めてしまうことで、同時に両方をとらえられなくなるといった手続上の限界が考えられる。家族は「家族」という実態があるわけではなく、あくまでもそれを構成する個人個人により形作られている概念である。GehringとMarti(1993)も述べているように、個人を「全体」から切り離さずに「全体」という枠組みの中で理解することが重要であると言えるだろう。以下に、こうした観点から家族全体とその部分を同時にとらえようとする方法を概観してみる。まず、家族メンバーを人形に見立ててボード上に配置させる方法をとる、Symbolic Figure Placement Techniques(SFPTs:図式的人形配置技法)のカテゴリーに含まれる幾つかの技法を紹介し、次に、日本で開発された紙の上に家族メンバーに見立てたシールないしは円形コマを配置した作品から家族構造をとらえようとする方法について述べる。

### 1. Family Distance Doll Placement Technique(FDDPT)

GerberとKaswan(1971)によって開発された方法で、家族メンバーに見立てた人形間の物理的距離に、メンバー間の親密さの感情(家族凝集性)が投影されるよう意図されている。実施は個人でも集団(家族全員)でも可能である。実施に際しては、ポジティブな出来事とネガティブな出来事についてイメージさせて、それからボード上に人形を配置することでそれらの状況を叙述させる方法をとる。前青年期の子どもを抱える家族を対象とした研究で、GerberとKaswan(1971)は、ネガティブな出来事よりもポジティブな出来事を想定させた場合に人形間の距離が近くなることを、また、両親は子どもよりも家族をよりまとめたものとして表現する傾向のあることを報告している。

### 2. Family Hierarchy Test(FHT)

FDDPTの研究を受けて、Madanes(1978)が開発

した方法である。情緒的親密さ(家族凝集性)に家族内の力関係の階層を示す「ヒエラルキー」の視点を加えた上で、親子の世代間の境界のあり方に注目する。それぞれの家族メンバー間の情緒的親密さは、4種類あるスティック状の人形を配置することで表現される。また、ヒエラルキーは8種類ある図表の選択により決定する。特定の二者関係における人形の配置は、それぞれの家族メンバーのヒエラルキーの位置を表す。FHTもFDDPTと同様に個人と家族集団の両方に実施できる。実施に際しては、まず家族メンバーは彼らの家族のヒエラルキーとほぼ一致する図表を選ぶよう依頼され、それから家族メンバー間の親密さを表現するために人形を動かすよう指示される。世代間の境界をとらえるのが目的なので、得点化は世代内と世代間の二世帯関係の比較に基づく。子どもの人形の高さが親の人形と同じか親より高い場合を「ヒエラルキーの逆転」とし、また、親子の人形間の距離が両親の人形間の距離と同じかより近い場合を「世代間連合」として、そうでないときに世代間の境界は強く、望ましい状態であると考えられている。

ヘロイン中毒者と精神分裂病者、何の症状も呈していないヤングアダルトを含む家族を対象とした研究(Madanes, Dukes & Harbin, 1980)では、家族凝集性とヒエラルキーの点から世代間境界を問題とすると、ヘロイン中毒者の家族の世代間境界が最も弱く、何の症状も呈していないヤングアダルトの家族の世代間境界が最も強く表現されたことが報告されている。この研究結果から、「世代間連合」と「ヒエラルキーの逆転」の視点から世代間境界の強度をとらえることが、家族の健康度の指標となることが明らかにされた。

### 3. Kvebaek Family Sculpture Technique(KFST)

Kvebaek, Cromwell, Fournier(1980)は、現実場面や理想場面を設定した上で、それぞれの場面で表現された家族凝集性と、場面間の差から、家族の変化への柔軟性をとらえることを目的としてKFSTを開発した。この変化への柔軟性は、円環モデルの適応性の次元に相当するものと思われ、前述したFDDPTやFHTとは異なる特徴である。KFSTはまず個人に、そして家族全員に、という順序でチェス様のボード上に人形を配置させ、その人形間の距離によって家族凝集性を表現させる。得点化手続きはピタゴラスの定理に基づき、二者関係や三者関係の距離を計算する。表現の一致度はすべての家族メンバーの表現した人形間の距離の平均と、個人の表現

の場面間の得点差より求められる。

#### 4. Family System Test (FAST)

家族全体とその構造を、家族凝集性とヒエラルキーの観点からとらえる目的で、Gehring と Wyler (1986) によって考案された。ヒエラルキーの次元を立体的・空間的に表現できるよう工夫したことで、KFST の幾何学上の問題を克服し、またヒエラルキーについてあらかじめカテゴリー設定するのではなく、表現者に自由に作成させるように改善したことで、FHT の概念的限界をクリアしている点の特徴である。FAST では、81マスに区切られているチェス様のボード上に、木製の人形を家族に見立てて配置し、その人形を近づけたり遠ざけたりすることで家族凝集性を表現させる。また、3サイズの円柱状のブロックで人形を持ち上げることでヒエラルキーを表現させる。ブロックはいくつ用いても、まったく用いなくても構わないため、3サイズのブロックの組み合わせによるヒエラルキーの表現には物理的な制限が少なく、表現の自由度が高い。

一般的に、家族構造の研究家たちは、「有能で、適応力があり、しかも健康な個人を作り出す家族の特性を把握し、理解」することが、援助的役割をとる人々、両親、教師、精神衛生の専門家の教育に役立ち、そして一次予防と治療的介入の役に立つ (Lewis ら, 1979) と考える。そのため、よく機能している家族にはどのような特徴があるのかということに興味を持っているのである。FAST を用いたこれまでの研究では、よく機能している家族には、家族内のどの二者関係よりも母親－父親という二者関係が最も権力を持ち、最も密着している (Gehring ら, 1990) という特徴が報告されている。要するに、家族は夫婦間の凝集性が最も高く、かつ、子どもよりも親のヒエラルキーが高く表現されるときに、よく機能することが示されてきたのである。反対に、親子二者関係が最も密着しているという「世代間連合」や、子どもが一人、もしくは両方の親よりも権力を持つという「ヒエラルキーの逆転」は、FHT と同様に機能していない家族の特徴であることが明らかにされている。

#### 5. 家族イメージ法

秋丸と亀口 (1988) が、KFST を独自にアレンジして家族内の相互作用をとらえる目的で開発した方法で、開発当初は家族凝集性のみに焦点を当てていたが、その後修正を重ねて、中野と亀口 (1922) によって、パワー (ヒエラルキーに類似の概念) が組み込まれた。家族イメージは、B4判のテスト用紙 (左半

頁は実施要領が記載され、右半頁は中央部に一辺15センチの正方形の枠が描かれている用紙) の右半頁の枠内に、各家族メンバーに見立てた円形シールをそれぞれ配置することで表現される。円形シールは直径1.5センチの大きさで、関心の方向を示すための鼻の印が付けられている。これは「顔シール」と呼ばれ、家族メンバーのパワーを表す黒から白 (強～弱) までの5段階の濃淡に色分けされたものが準備されている。制作者は、まず家族メンバーそれぞれに対して一枚の顔シールを選択して枠内に配置し、次にそのシールが家族内の誰を表すか (父親、母親など) を記入し、最後にシール同士を実際の二者関係に置き換えて、結びつきが強い場合は二重線 (=), 普通であれば実線 (—), 弱いもしくはよくわからない場合は点線 (···) で結ぶよう教示される。シール間の距離は、家族メンバー間の心理的距離 (家族凝集性) を表す。臨床場面で実施する際は、面接に出席したすべての家族メンバーに対して面接の初期、中期、後期などの節目で実施し、家族のイメージの変化から状態をアセスメントする目的で用いられることが多い。投影法の中でも紙とシールと筆記用具によって容易に実施できるため、集団にも適用可能である点の特徴である。

秋丸と亀口 (1988) が中学生のいる非臨床の家族 (34家族, 115名) を対象に、子どもから見た両親との心理的距離について、FES との関連性から考察している。それによると、子どもが自分と両親との心理的距離を近く表した群は、FES の凝集性の次元で高く、葛藤の次元で低く認知しており、一方遠く表した群は凝集性の次元で低く、葛藤の次元で高く認知していることが確認された。つまり、自分と両親との心理的距離が近いとイメージしている子どもは、家族全体の結びつきが強く、葛藤が少ないと認知していることが示されたのである。

#### 6. 家族関係単純図式投影法

水島 (1978) によって考案された図式的投影法の一つで、手作り方式とパソコン方式とがある。家族メンバーをあらわす一円玉大の円形コマを用いて、B5判白紙上もしくはパソコン画面上の直径12センチの円を家族として、家族関係を図式化させる方法である。健康な家族とそうでない家族の弁別可能性について草田 (1994) は、大学生127名を対象とし、FACESⅢの家族凝集性の次元や家族健康尺度、家族満足度との関係から、図式上に投影されたメンバー間の「距離」とそれへの「説明」との2側面について考察している。それによると、大学生では父母、父子、母子、および父親と母親と子どもの三者

間の距離が近い群は、遠い群に比べて家族凝集性、家族健康度、家族満足度の高いことが示され、「距離」という指標が健康な家族とそうでない家族を弁別するのに有効であることが示された。ただし、「説明」という指標については、「距離」の遠い群であっても一概に問題があるといえないような結果が得られている。草田はこうした相反する結果を、中学生を対象とした研究(草田ら, 1990)と比較し、発達段階による違いであると結論づけている。

以上のSFPTsおよび家族イメージ法、家族関係単純図式投影法は、質問紙法と比較して、読解力を必要としないため、対象年齢が幅広く、おおよそ6歳から実施することができる(Gehring & Schultheiss, 1987)。また、その他の投影法(たとえば家族描画法など)と比べて作業時間が10~30分程度と短く済むため、さまざまな出来事や場面についての家族イメージを、特に家族凝集性やヒエラルキー(パワー)に焦点を当ててとらえられる点が特徴と考えられる。

またこれらの方法は、視覚に訴えることで制作者および評価者双方に家族を全体としてイメージすることを容易にさせる。制作者にとっては家族を一つのユニットととらえた上で、各自がそのユニットの大切な一部であることを理解する機会ともなるため、水島・安武(1992)、水島(1993)が述べているように、こうした投影法はアセスメントとして有用だけでなく、心理療法の媒体としても有効で、心理療法的な洞察を深めることができるという面でも重要であると言えるだろう。

## 観 察 法

心理臨床の現場では、クライアントの主観的な情報のみではなく客観的な情報によるアセスメントをも無視できない。したがって、質問紙法や投影法による情報は観察法で得られる客観的な情報と併せて理解される必要がある。以下に、客観的な情報をイメージ化してとらえる方法として1つ、得点化してとらえる方法として2つ、計3つの方法を取りあげる。

### 1. 家族システム図法

亀口(1989)によって開発された方法で、心理臨床の面接のビデオ記録をデータとして、家族をイメージ化するものである。円で家族メンバーを、各円の大きさで面接時間内の発言総数を、各円を結ぶ直線の矢印の向きで関心の方向を、その直線の幅で矢印の向いた相手への(肯定的・否定的感情を伴う)関与

の度合いを、各円の距離で親密度をとらえようとする。治療経過の節目でビデオ記録し、臨床事例における治療の変化を“家族という生命システムの全体像”を反映する視覚的イメージとしてとらえることを目的としている(亀口, 1991)。

### 2. 臨床家族査定尺度

岡堂・草田・田口(1993)によって開発された方法で、家族療法的介入によって変化が期待される家族関係の構造・機能等を評価する用具である「臨床家族尺度Ⅰ」と、Olsonらの円環モデルを構成する3次元(家族凝集性・家族適応性・家族コミュニケーション)を手がかりとして家族関係の構造・機能等の評価をさらに明細化した「臨床家族尺度Ⅱ」から構成される。すべて7件法(1~7点、中央の4点が最適値)で評価する。家族のあるがままの状態を心理臨床家自身が観察し、評価することで、問題点を焦点化し、適切な援助的介入や教育的配慮を企てるために実施される。ここでは家族凝集性を含む「臨床家族尺度Ⅱ」について述べる。まず家族凝集性の次元は「家族を構成する人々が、どのように結ばれているかの程度」とされ、家族内の絆、家族内の依存性、夫婦関係の親疎度、親子の連合度、境界の柔軟性の5つの下位尺度から成る。次に家族適応性の次元は「家族システムが状況的あるいは発達の危機(ストレス)に対応して、その勢力構造、役割関係、家族ルールを変える能力」であり、リーダーシップ、しつけ(夫婦だけの場合は価値観)、問題解決への取り組み、役割関係、家族ルールの5つの下位尺度から成る。最後に家族コミュニケーションの次元は「上記の2次元の働きを促進する機能を持つ、家庭内で交わされる言語的、非言語的な相互作用」であり、メッセージの受容性、言語的コミュニケーション、非言語的コミュニケーション、情意・考えを表現する自由、コミュニケーション技能の5つの下位尺度から成っている。

### 3. 家族システム評価尺度

Lewisら(1979)の研究グループが開発した尺度で、ビデオ記録する手法を用い、家族相互作用の面接場面を10分から50分間観察した後、家族を9件法(1~5点、0.5点間隔で1点もしくは5点が最適値)で評価する。5次元あり、1つめの家族構造の次元は、表面に出たパワー overt power、両親連合 parental coalition、近接度 closeness、パワー構造(すなわち家族内での優先順位)の4つの下位尺度から成る。2つめの家族神話の次元は1尺度で1次元であり、現実との適合度を評価する。3つめの目標

を志向した対話も1尺度で1次元であり、家族の対話がいかに問題解決において効率的かを評価する。4つめの自律性の次元は、自己概念の伝達、責任感、おせっかい invasiveness(気持ちの先取りの発言)、虚心坦懐さ permeability の4つの下位尺度から成る。最後に5つめの家族の情緒の次元は、表現度 expressiveness、雰囲気とその色合い mood and tone、葛藤 conflict、共感性 empathy の4つの下位尺度から成る。

これらの観察法に基づく家族アセスメント尺度は、いずれも評価するにあたってかなりの訓練を必要とするため、容易に実施できない。Lewisら(1979)が評価者の訓練の量と経験の量の違いによる評価の信頼度を検討した結果からも、こうした訓練や経験の影響が見逃せないことが示唆されている。

### ま と め

本論文では、家族アセスメントの方法として質問紙法、投影法、観察法という形式の手法より幾つかの尺度を紹介し、それぞれの特徴や問題点、開発された目的などについて展望してきた。まず、質問紙法は家族を全体としてとらえようとする意図のもと、項目内容自体に全体としての家族を想定させるように工夫されてきていることがわかった。ただ、家族メンバー個人の主観的情報を、より客観的に判定するための工夫(たとえば、家族メンバーすべてに質問紙を実施した結果から、回答の不一致度などを判定するなど)がみられるものの、当然のことながら、そこで得られる情報と観察法によって得られるような、第3者によって評定されたという意味で客観的な情報とは質的に異なっている。また、主にOlsonによる円環モデルに端を発した、得点が極端でない場合に家族機能の健康度が高く、極端であるほど病理性が高まるという家族機能のカーブリニア性に関する問題が残されていると言えるだろう。今後は、家族を診断的にアセスメントする際に、高ければ高いほど病理性が高いことが確認できているような質問紙、つまり家族の健康度との間に負のリニアな関係を想定できる尺度との関連性を踏まえて、更なる尺度の洗練が望まれる。

また、個人を全体から切り放さずに全体という枠組みの中で理解する目的で、数々の投影法が開発されてきているが、それらは心理療法の現場で、アセスメントとして有効なだけでなく、クライアントの自己洞察をうながす点で心理療法の媒体となるという特徴が考えられた。投影法は質問紙法に比べて、その結果を心理療法の過程の中で直接活かすこ

とができる点でも興味深い。一方、観察法も家族療法の現場と密接に関係している方法で、心理臨床家自身が家族のあるがままの状態を観察し、評価することで問題点を焦点化し、適切な援助的介入や教育的配慮を企てるために有効な方法である。投影法が、制作者自身の自己洞察を深めるための媒体として利用できる方法であるのに対し、観察法は第三者の評価という違いはあるものの、観察結果のフィードバックは投影法同様、個人の自己認識を深める働きをもつ。

よりよく家族を理解するためには、方法の違いによる問題点や利点などを考慮した上で、これらのアセスメント尺度による最適なテストバッテリーの活用が望まれる。

### 引用文献

- 秋丸貴子・亀口憲治 1988 家族イメージ法による家族関係認知に関する研究 家族心理学研究, 2 (1), 61-74.
- Dundas, I. 1994 The family adaptability and cohesion scale III in a Norwegian sample. *Family Process*, 33, 5-18.
- Gehring, T.M. & Marti, D. 1993 The Family System Test: Differences in perception of family structures between non clinical and clinical children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 34(3), 363-377.
- Gehring, T.M. & Schultheiss, R.B. 1987 Family measurement techniques: Spatial representation and assessment of family relationships. *The American Journal of Family Therapy*, 15(3), 261-264.
- Gehring, T.M., Wentzel, K.R., Feldman, S.S. & Munson, J. 1990 Conflict in families of adolescents: The impact on cohesion and power structure. *Journal of Family Psychology*, 3(3), 363-377.
- Gehring, T.M. & Wyler, I.L. 1986 Family-System-Test (FAST): A three dimensional approach to investigate family relationships. *Child Psychiatry and Human Development*, 16(4), 235-248.
- Gerber, G.L. & Kaswan, J. 1971 Expression of emotions through family grouping schemata, distance and interpersonal focus. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 36, 370-377.
- Green, R.F., Harris, R.N. Jr., Forte, J.A. & Robinson, M. 1991 Evaluating FACESIII and the circumplex model: 2440 families. *Family Process*, 30, 55-73.

- 亀口憲治 1989 登校拒否の家族療法事例—増強フィードバック法による母子システムの構造変化—家族心理学研究, **3**(1), 45-54.
- 亀口憲治 1991 「家族境界膜」の概念とその臨床的応用 家族療法, **8**(1), 20-29.
- 草田寿子・水島恵一・大平英樹・岡本かおり 1990 図式的投影法による人格・家族関係の研究(2)—単純家族図式のパターン分類—日本心理学会第54回大会発表論文集, Pp.278.
- 草田寿子 1994 家族関係単純図式投影法の基礎的研究Ⅱ—家族図式の妥当性—文教大学人間科学研究, **16**, 98-103.
- Kvebaek, D., Cromwell, R. & Fournier, D. 1980 *The Kvebaek Family Sculpture Technique: A diagnostic and research tool in family therapy*. Jonesboro: Pilgrimage.
- レヴィス, J.M., ビーパーズ, W.R., ゴセット, J.T. & フィリップス, V.A. 本田 裕・國谷誠朗・岡崎祐士・宮内 勝・渡辺諄二・安西信雄・中堀任四郎(訳) 1979 織りなす緩—家族システムの健康と病理 国際医書出版(Lewis, J.M., Beavers, W.R., Gossett, J.T. & Phillips, V.A. 1976 *No single thread -Psychological health in family systems*. New York: Brunner/Mazel.)
- Madanes, C. 1978 *Predicting behavior in an addict's family: A communicational approach*. In L. Wurmser (Ed.), *The hidden dimension*. New York: Jason Aronson.
- Madanes, C., Dukes, J. & Harbin, H. 1980 Family ties of heroin addicts. *Archives of General Psychiatry*, **37**, 889-894.
- ミニューチン S. 山根常男(監訳) 1983 家族と家族療法 誠信書房(Minuchin, S. 1974 *Families and family therapy*. Cambridge, MA: Harvard university press.)
- 水島恵一 1978 実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ 文教大学紀要, **12**, 1-11.
- Moos, R. & Moos, B.S. 1974 *Family Environment Scale (FES)*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- 中野まり・亀口憲治 1992 思春期の子どもとその両親の家族イメージ—臨床群と非臨床群の比較を通して—福岡教育大学紀要, **41**(4), 283-290.
- 西出隆紀 1993 家族アセスメントインベントリー—の作成—家族システム機能の測定—家族心理学研究, **7**(1), 53-65.
- 野口祐二・斉藤 学・手塚一朗・野村直樹 1991 FES(家族環境尺度)日本版の開発:その信頼性と妥当性の検討 家族療法研究, **8**(2), 147-158.
- 岡堂哲雄・草田寿子・田口博子 1993 臨床家族査定尺度 岡堂哲雄(編) 心理検査学—臨床心理査定の基本—増補新版 垣内出版 Pp.581-590.
- Olson, D.H. 1986 Circumplex model VII: Validation studies and FACES III. *Family Process*, **25**, 337-351.
- Olson, D.H., McCubbin, H.I., Barnes, H., Larsen, A., Muxen, M. & Wilson, M. 1985 *Family inventories: Inventories used in a national survey of families across the family life cycle*. St. Paul, MN: Family Social Science.
- Olson, D.H., Sprenkle, D.H. & Russell, C.S. 1979 Circumplex model of marital and family systems: I. cohesion and adaptability dimensions, family types, and clinical applications. *Family Process*, **18**, 3-28.
- 大熊保彦 1992 家族関係の心理査定 岡堂哲雄(編)家族心理学入門 倍風館 Pp.219-233.
- 立木茂雄 1994 登校ストレスと家族関係—共分散構造分析による因果モデルの検証—日本家族心理学会(編) 家族心理学年報12 家族における愛と親密 金子書房 Pp.50-65.
- 立木茂雄・栗本かおり 1994 青少年における自我同一性の発達及びその拡散現象としてのアバシー傾向に対する家族システムの影響:共分散構造分析によるグローティヴァントとオルソンのモデルの比較検討青少年問題研究, **43**, 1-30.
- Walker, L.S., McLaughlin, F.J. & Greene, J.W. 1988 Functional illness and family functioning: A comparison of healthy and somaticizing adolescents. *Family Process*, **27**, 317-325.
- 横山登志子・橋本直子・栗本かおり・立木茂雄 1997 オルソン円環モデルに基づく家族機能評価尺度の作成—FACESKGV—実年版の開発—関西学院大学社会学部紀要, **77**, 63-84.

—1999. 9. 30 受稿—